

# 早期発見による死亡率減少に期待

## 「先行事例と情報共有で課題を解決」

（1面から続く）第40回予防医学実務研修会では、講演とともに県がん・疾病対策課と、すでに内視鏡による胃がん検診を実施している大和市、厚木市からの情報提供があり、質疑応答とともに、内視鏡検診導入を具体的な視点で考えることができた。

### 浮かび上がる課題

講演に先駆けて行われた県保健福祉局保健医療部が、疾病対策課の長嶋仁美主事からの情報提供では「検診を実施している5つのがんのうち、り患率が男女ともに唯一減少傾向にあるのが胃がん。さらに、り患率に比べ死亡率の減少が大きく、早期発見、早期治療のためにも胃がん検診の役割は大きい。今回のガイドライン改訂で内視鏡検診の死亡率減少効果が認められ、推奨グレードがX線検診と同じBに引き上げられた。一方、血液中の血清ペプシノーゲンとヘリコバクター・ピロリ抗体を測定するリスク検診は推奨グレードIからも分かるように、ドIからも分かるように、死亡率減少効果を示す証拠が不十分であることを示している」と説明がありました。

見に効果を上げていないことも示されまし

さらに、導入6市からの聞き取り調査から、「受診者数が増加した場合の予算の確保」「内視鏡検査医、医療機関の不

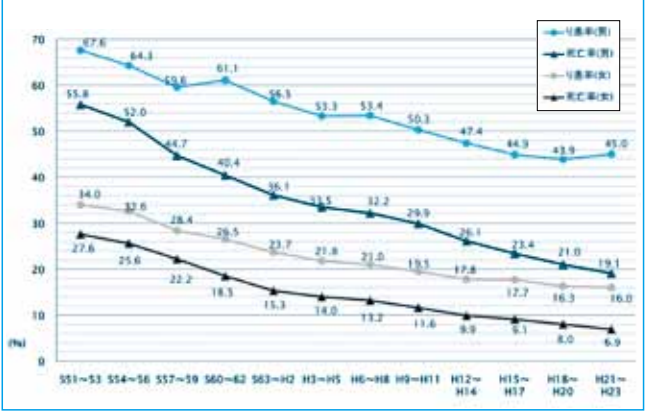
足」「二次読影体制の確保」「偶発症が発生した場合の対応」「精度管理の方法」など、対象年齢、受診間隔など国指針と現在の実施体制の相違」などの課題が浮かび上がり、「内視鏡検診導入には課題も多く、特に人口規模の小さい市町村では難しいが、県でも精度管理や人材育成など試行している。先行導入した自治体の事例を情報共有しながら、一緒に進めていきたい」と現状における課題と今後の方針がまとめられました。

また、平成24年度の川崎市、厚木市、大和市、海老名市4市の実績から、がん発見数に占める早期がんの割合が、X線では3割であるのに対し、胃内視鏡検査では5割と、早期がんの発

### 受診率向上には効果

また講演後、質疑応答に移る前に、大和市と厚木市の現状報告がありました。受診率向上の策として内視鏡検診を導入した大和市は「胃がん検診全体の受診率は上昇傾向にあり、平成

本県における胃がんの年齢調整り患率・死亡率の変化



県内における胃がん検診の現状

| 検診の種類  | 実施市町村 (H28. 4時点)                                                  | 導入の主な理由                                                         |
|--------|-------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------|
| 胃X線検査  | 横須賀、鎌倉、三浦を除く30市町村で実施                                              |                                                                 |
| 胃内視鏡検査 | 横浜、川崎、相模原、厚木、大和、海老名の6市で実施                                         | ・受診率向上のため<br>・胃X線検査実施医療機関の減少に対応するため                             |
| リスク検診  | 横須賀、鎌倉、藤沢、小田原、逗子、三浦、厚木、座間、綾瀬、葉山、大磯、二宮、山北、開成、箱根、湯河原、愛川、清川の18市町村で実施 | ・受診率向上のため<br>・胃X線検査の受診が困難な住民への対応のため<br>・医師会との協議により効果的な検診と判断したため |

平成24年度 市町村別胃内視鏡検査実績

|          | 受診者数    | 要精密検査者数 | 精検受診者数 | がん発見数 | 要精検率   | 精検受診率   | がん発見率  | 陽性反応適中度 |
|----------|---------|---------|--------|-------|--------|---------|--------|---------|
| 川崎市      | 3,522   | 657     | 534    | 20    | 18.65% | 81.28%  | 0.568% | 3.044%  |
| 厚木市      | 4,195   | 910     | 449    | 13    | 21.69% | 49.34%  | 0.310% | 1.429%  |
| 大和市      | 6,600   | 2,048   | 2,048  | 31    | 31.03% | 100.00% | 0.470% | 1.514%  |
| 海老名市     | 1,269   | 271     | 270    | 7     | 21.36% | 99.63%  | 0.552% | 2.583%  |
| 合計       | 15,586  | 3,886   | 3,301  | 71    | 24.93% | 84.95%  | 0.456% | 1.827%  |
| 参考胃部X線全県 | 148,274 | 15,793  | 11,787 | 223   | 10.65% | 74.63%  | 0.150% | 1.412%  |

師から報告されました。続いて厚木市では健康づくり課の山口勝主査から「平成23年の導入から、内視鏡検診の受診者数は約2倍に増えたが、運営委員会や読影委員会は、まだ検討段階。特に二次読影は人手の確保が課題と考えている。また指針どおり2年に1回の受診に変更する場合

には、市民の理解が得られるよう十分な周知・説明をする必要がある」との報告がありました。

### 周囲との協力体制も

質疑応答では、機材や予算、二次読影によるダブルチェック、鎮静剤の使用など、運営に関する質問が多く寄せられました。「人口規模が少ない市町村では専門医も少なくダブルチェックが難しい」という質問に、細川先生は「見逃しや偽陰性を最小限にし、内視鏡がX線よりも優れた検査とするには全例の二次読影が必要」と、新潟市の例を上げて、周囲の市町村が協力体制を敷いてカバーすれば解決できるということを示しました。また、海老名市の実例も担当者から聞くこと

ができました。「今後X線検診は完全に廃止の方向か」の問いには「X線検診も画像がデジタル化され、きれいになっていて、優れた技術者も出ているので、内視鏡検査が全てという時代はまだ来ない」と細川先生の回答。

「県でも平成26年度から市町村の担当者を集めた研修会を始め、この研修会での情報共有を進め、県内の市町村の実施状況を正確に把握することから取り組んでいきたい」と長嶋主事は県の方針を述べました。

講演後のアンケートには「県内の現状の把握ができたことが、まず学びになりました」「単純に医療機関への依頼だけではできないことが明らかになりました」「先駆的に内視鏡を導入している自治体の方から、直接状況を聞いて参考になりました。受け皿、予算の確保など、課題がたくさんあることを改めて考えました」「二次読影の問題など現実的な課題がとてもよくわかりました。町村では単独実施が難しく、今後に向けての体制づくりの参考になりました」「前もって住民に周知した方がよい内容もわかりました」などがありました。

これらの声からも各市町村の胃がん検診の内視鏡検査への理解が進んだと思われます。

## 私と協会

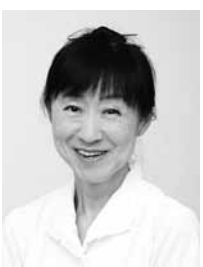
－60周年に思うこと－ ⑩

湘南記念病院かまくら乳がんセンター長  
ピンクリボンかながわ代表

土井 卓子

土井 卓子氏

略歴  
1984年 横浜市立大学医学部卒業  
90年 同大学院卒業  
90年6月～93年5月 横浜市南部病院  
93年6月～95年3月 横須賀共済病院  
95年4月～2008年7月 横浜医療センター  
2008年8月～ 湘南記念病院  
2013年4月 ピンクリボンかながわ代表



私は医師になって32年目です。医学生の時から実習で協会にお世話になりました。

研修医の頃は、ちょうど乳がん検診が開始された時期でした。週に何回も検診車に乗って神奈川県内を回り、視触診を行いました。検診車では、普通では行くことがないような様々な地域に行きました。郊外の場合は遠足気分になったり、検診車の屋根が踏切のポールに当たって折れてしまったり、検診車の後ろに停めた私の車が検診業務中に駐車違反車としてレッカー移動されてしまったり、台風で帰れなくなったり、忘れられない思い出がたくさんあります。

そのご縁で、外科医になった後は、要精査となった受診者の診察も担当しました。当時のエコーの機械は開発されたばかりで、プールのような水槽の中に乳房を垂らして自動でスキャンする方法でした。機械の進歩、検診方法の

マンモグラフィへの移行、読影精度管理の厳密化に伴い、協会の担う業務もどんどん変化しました。

私も遅れをとらないよう乳がんの診察、治療の勉強に追われる日々を送っているうちに、とうとう乳腺を専門とする医師となりました。医師会が行うマンモグラフィ講習会も、協会が中心となって開催していますが、私も一準講師としての参加から始め、現在では精中機構のスタッフとして企画運営、事前講習にも携わっています。さらに、この間に母、叔母の乳がん罹患も経て、2013年よりピンクリボンかながわの代表も務めさせていただいています。

医師としてのそのスタートから現在まで、すべて協会と一緒に歩んできました。超音波の講習会開催や検診への導入などの検討すべき重要案件も含め、今後も協会と一緒に奮闘していくつもりです。